

資料

商学士安達太郎編

『徳川時代 経済秘録全集』*

(1941年, 松山房)

小林和子

はじめに

ここで紹介しようとするものはすでに70年以上も前に出版された1冊の図書である。表面的には安達太郎著ということになっているが、内容はタイトルが示すように徳川時代の「経済秘録」(安達の使用した表現)10書を採録したものである。10書は現在のような近代的「出版」「刊行」の形式を採った著書とは言えないが、これらに対する安達の役割は「編集、解題、校訂、註解」である。その「秘録」の内容もあるいは「資料」とするよりは「史料」とすべきものかもしれない。

資料紹介者は日本証券経済研究所『日本証券史資料』編纂を長く続けてきたが、既刊の戦後編(昭和20~40年)編纂の時から、市場内部に残された資料をできる限り多く渉猟してまとめておきたいと考え、民間資料を重視してきた。戦前編においてはとりわけ相場道文献及び相場格言集・用語集などを何らかの形で「市場資料」として一括しておきたいと考え、第9巻にこれらを採録した。相場道文献は数多ある中で

『徳川時代 経済秘録全集』に代表させた。同書はそれ自体が太平洋戦争開戦前の時期に刊行されているばかりでなく、採録された「経済秘録」の原著は徳川時代に執筆されたものである。読み難いことこの上ない。同書には安達の解題が付されているにも拘らず、屋上屋を架すような資料紹介を試みたのは、この読み難さを乗り越えて、その真髄を知ることが「市場」の歴史の、またある面では現在の「市場」取引を形成する心理的な要素の理解に役立つと考えたからである。

相場道文献の集大成

相場道に関する文献は玉石混交で数多あるが、証券界や国会図書館に所蔵されていないものもまた多いと思われる。執筆者・発行者や所蔵者がこれらを後世に残すべき文献と把握することなく、国会図書館に寄贈することはおろか、自社・自宅に所蔵していたとしても、所蔵者が亡くなれば他の古いものとともに捨てられた例も多かったであろう。すなわち他の分野に比べ相場道の分野ではすべての出版物・文献を

* 当所『日本証券史資料』戦前編第9巻, 2013年に採録

渉猟して取捨選択することは不可能に近いといわねばならない。さりながら、遡って淵源を調べることは意外に困難ではなく、時代でいえば徳川時代の、取引の対象でいえば米相場を巡る文献類に容易に逢着する。そしてこの分野ではすでに第二次世界大戦前の時期に代表的な文献を適切に保存すべきだと痛感した先人が、一書をまとめて復刻している。すなわち、商学士安達太郎による『徳川時代 経済秘録全集』東京松山房（昭和16年7月）である。以下に見る安達の選択した10書は、21世紀の現在に残された相場道文献の王道を行く、古典と考えて良いであろう。安達は昭和16年の段階ですでに相場道の古典と目された10書を選択し、編集、解題、校訂及び注解を加える大役を果たした。市場取引に疎い21世紀の研究者が散逸した資料・文献を探索して新たに選択するよりも、この分野に通暁した安達の選択と編集を改めて活字として残すことの方がはるかに有意義であると、一読すれば納得しうると考える。

本書は当研究所証券図書館高橋亀吉文庫所蔵の原本に拠った。原本はB6版、解題と本文の計で500頁、すでにかなり色あせているが濃ベージュ（あるいは茶）色の布製のハードカバーが付けられている。奥付によれば初版印刷昭和16年7月1日、初版発行同5日で、奥付頁の上にざら紙謄写版刷りで「出版会承認番号と出版部数（1000部）」が貼られている。時代を反映して配給元は同年5月5日設立の「日本出版配給株式会社」である。当研究所証券図書館所蔵の複製本は昭和16年出版の原本を昭和48年に（著作権者不明等の場合の文化庁の裁定制度により）出版利用が可能として大阪の玉栄宝資友の会が複製を制作・発売したもので、シリーズ名「相場成功名作全集」の天ノ巻である。国

会図書館の所蔵本リストによれば玉栄会出版部による同全集には他に和ノ巻、地ノ巻、人ノ巻など数冊あるが、旧巻の複製本はこの天ノ巻のみである。この複製本は原本をそのまま同じ頁数に完全複製したものであるが、残念なことに432～433頁を欠いている。収録された10書の各原本の一部は国会図書館の近代デジタルライブラリーで閲覧可能であるが、異本がある。安達は昭和16年現在で比較可能な限りの異本を検討し、最良のものを編集し、校訂を加えた、と述べている。当所資料編纂室では安達の編集を尊重し、改めて各種異本を比較検討することはしなかった。本文校訂に、より深くご興味をお持ちであれば、国会図書館の異本に直接当たる方法があることを付記する。

安達は奥付では本書の著作者を名乗ったが、本書の内容はタイトルの示すように徳川時代の複数の文献の復刻版であり、序文では自らを「編集・校訂・解題・注解」者と記した。復刻版といっても写真や複写による完全複製本ではなく、編集者の手が増えられたものである。本書の背表紙・中表紙には安達の名前の前に「商学士」の肩書が付けてある。本書以外に安達には『相場道の金言』松山房（大正13年）、『商況面の基礎知識』商況研究会（昭和9年）、『経済市況の全知識』商況研究会（昭和9年）、『市場用語辞典』商況研究会（昭和10年）、『商況読本』商況研究会（昭和9年）の著作があり、『金言』と『辞典』は戦後の証券界にも伝わったが（大阪証券取引所所蔵）、むしろ古典を集めて復刻した本書によりその名を21世紀にまで残した。国会図書館で見ると「商況研究会」の出版物は安達の著書しかなく、『経済市況の全知識』奥付で確認したところ商況研究会の代表者は安達である。安達の著書は（確認しうる限

り) 最初(大正13年)と最後(昭和16年)に松山房から出されたが、その間の4著は個人出版に近いものであった。安達について著書以外の面ではほとんど情報がない。

本書の構成と安達の功績

本書の内容構成は目次により以下の通りである。

解題 [安達太郎]

- | | |
|----------------------------|--------|
| 一 売買出世車
延享5年3月(1748) | 東白著 |
| 二 三猿金泉秘録
宝暦5年(1755) | 牛田権三郎著 |
| 三 八木虎之巻
宝暦6年(1756) | 猛虎軒著 |
| 四 商家秘録
明和7年(1770) | 大玄子著 |
| 五 米道大意
安永初年頃(元年が1772) | 著者不詳 |
| 六 八木豹之巻
安永2年(1773) | 猛虎軒著 |
| 七 宗久翁秘録
寛政年間(1789~1801) | 本間宗久著 |
| 八 八木竜之巻
寛政10年(1798) | 見幾館主人著 |
| 九 増補諸色相庭高下伝
寛政13年(1801) | 玉江漁隠著 |
| 十 卜筮貨殖考
弘化2年9月(1845) | 井上鶴州著 |

この目次の前に「序」(安達)が、後に「例言十則」(安達)が置かれている。

二、四、七は書名に「秘録」の文字が入っており、とりわけ中核というべき七の「宗久翁秘録」から本書の書名が考究されたものである

う。

「序」では「本全集は、投機業者の經典[資料紹介者の注：三、六、八、二、一、四、七、九]、相場卜筮の代表書[十]、取引所論の珍書[五]を取録して、原著作の年次に配列し、解題を加え、頭註として字句解を施したものである」と述べ、簡にして要を得た内容紹介を冒頭においた。さらに「これらの諸書は従来期米取引の六韜三略であったが」その大部分は「現時の株式商品の清算取引にも適用しうる」すなわち「投機業者の修養・材料・人気の観察、騰落の法則、仕掛・手仕舞の時機等」には差別がなく、遵守すべき信条もまた相通じるからだとする。現に安達は『相場道の金言』を著わした時に「その大半を本全集の諸書から抜粋した」という。大正から昭和にかけて株式・商品市場の内部の取引者であったか、あるいは商学士の経歴から市場周辺ジャーナリズムに身を置いたと見られる著者の実体験を踏まえて、本書に採録された諸書は高い評価を与えられたといえる。しかし、本書が編まれた昭和16年は第二次世界大戦の勃発後で、国内的にはいわゆる経済新体制が唱えられた時代であったため、「決して投機思惑を鼓吹する所存ではなく、寧ろ市場人が斯道の本領を体得することによって投機を投資化し、危険を安全化し、公私を利する所大なるものがある」とされた。

とはいえ、賢明にもその点に深く立ち入ることはせず、米価・米取引所を中心として高度に発達した徳川時代経済が世界の最高峰を行くものであったにも拘らず、「従来これが学者研究の埒外に放擲されていた」ことは遺憾であり、本書をこの学問的処女地開拓に資する貴重な文献だと位置づけた。経済の観点からのみならず、二義的には多くの勝負の場の法則は「相場

道と一脈相通ずるものがある」故に、また特殊的には農業家、商業家、数学者、語源研究家などにも有益な資料となるだろうことが予想されている。著者は本書を「決定版」たらしめたく、異本を対照し、厳密な校正に大いに努めたが、従来学者が対象としてこなかった分野であるために参考資料はなく、出来上がりを完璧だと自負してはいない。安達がこのように書いた時点から70余年を経て、この分野が学問的に陽の目を見た事実はないが、テクニカルな面は戦後の株式市場において罫線分析及びチャートリストの活動として一定の成果を見、「相場信条」の面では今なお根強い人気を保ち続けている。さりながら、徳川時代の米取引と、実物取引のファンダメンタル分析を核にした現代の株式取引では、市場そのものの性格が異なり、安達が希望したように本書がそのまま活用されることは蓋し不可能になった。

著者が厳密な校訂を加えたことには昭和16年現在すでに大きな意義があったが、21世紀の現在には一層その意義が大きく、内容を理解し、読み下す意欲のあるものにとって本書はある程度読み易くなっている。これを可能にしたのは「例言十則」、すなわち1（原本に忠実）、2（異本は頭註参照）、3（原文の誤り等は注記）、4（ありがちな誤謬はそのまま）、5（一律に句読点を付す）、6（原文にはほとんどないが、全文に振り仮名を付す）、7（原文の振り仮名の誤謬は訂正）、8（太陰暦）、9（頭註にない難解な経済語は『辞典』参照）、10（市場俚言は『金言』参照）と解題であり、これらにこそ安達の仕事の真髓が凝縮されていよう。『辞典』は前掲『市場用語辞典』、『金言』は同『相場道の金言』であろう。中表紙裏面の「安達太郎著」一覧では冒頭に掲げられた本書の書名の前

に「頭註付決定版」の語が置かれている。なお、「値段」の文字は徳川時代には「直段」と表示され、明治以後の戦前期には両者が混在して使用された。「値」の字義には「直」に通じる（あたいと読む）ところがある故である。因みに高直（かうぢき）、下直（げぢき）のルビが付された場合もある。

10書の内容

以下、安達の解題に沿って、10書を簡単に紹介する。

一 売買出世車 米相場で成功した大富豪（浪花津の住人某）から金儲け談を聞いて発行者が編纂したものと思われる。表紙ではなく本文タイトルには前に「米穀」が付く。正式には『米穀 売買出世車 付図式』である。他の書にもこうした完全タイトルの省略が多いのは、相場道の著書は流布する過程で基本部分が明確であれば良かったためだと思われる。上下の2巻があるが内容的には秘術・妙法の類はなく、孟子を引いた「天の時地の利をはかりて人の和をすること」など平凡な常識論にとどまる。見るべきは付録の図式（市場関係の精図）と堂島市場機構関係の解説で、これらが市場の実際を知る好個の資料となっている。

二 三猿金泉秘録 牛田権三郎（伊勢の人、本名と思われる）も米取引に工夫を凝らした人生を送り、悟りを開いて、（強変を）見猿（見ざる）、（弱変を）聞猿（聞かざる）、（強変を見聞きしても人に）言猿（言わざる）を「三猿の秘密」とし、騰落には必ず限度があると相場道の理想を説いた。日本語では「猿」と否定形の「せざる」の語呂合わせと、三匹の猿が両手で目、耳、口を隠す形が結びついているが、

中国やインドなど世界の他の地域では語呂合わせはない。国会図書館蔵書で見ると、「三猿」が書名に入る最大の分野は米・株式等の投機、相場道に関わるものであり、その他は「三猿」そのものの由来、庚申信仰（申すなわち猿）、日光その他の三猿像ゆかりの地、俳諧関係などである。元来は相場とは関係のない禁止、戒めの定型であったものが、日本では徳川時代に相場道と結びついて「相場文化」の一つの定型を確立したといえる。その原型となったのが本書である。

本書はタイトルに「校正」版と付されたもので、牛田の著書を約100年後の嘉永4年に鳴川猛之助が校正した。表紙裏面には「牛田権三郎遺稿、鳴川猛之助校正 活法秘論四冊合全部五卷 校正三猿金泉秘録 全 一大周秋作見積之図一補付」と書かれている。流布本が多く、和歌の欠落や、文字の誤りなどを校正し、完全版としたという。「内容充実、卓説創見に富み、和歌文章に金玉の響きがある」「迷信に囚われていない」と安達の評価は非常に高い。21の着目点に区分して、それぞれが歌や短文で構成されている。金泉録の極意は「高安の理は空理にて目に見えず、かげも形もなき物が体」と表現された。今に伝わる売買の目安に以下がある。

「百年に、九十九年のたかやすは、三割こえぬ物としるべし」

「いつにても、二割あげては九分一分千天元のうり句としれ」

「いつにても、三割さげは米くづれ、万天元のかひ句としれ」

本間宗久翁の著書と共に市場で永く「相場の聖典」と崇められてきたようで、平成年間に入ってもなおこの本の解説本が出版されている。

三 八木虎之巻 猛虎軒（浪花の人）がいかなる人物であったかは不明だが、総論中の文言と内容から堂島米市場で渦中にあった人と推測される。「猛虎軒」と名乗ったのは、後出『八木豹之巻』に「相場の高下は——物の象にして見る時は、猛虎のたはむれ遊に似たり」という文言に由来すると思われる。タイトルには前に「糶糶」（てきちょう）、本文の前のタイトルには「糶糶必用」が付く。なお、現在の漢和辞典には「糶糶」はなく「糶糶」があり（講談社『新大辞典』平成5年版）、両者ともに現在の中国語辞典にはない（『現代漢語詞典』2002年版）。本書は八木（はちぼく、「米」の字を「八」と「木」に分解したもの、すなわち米）相場成功の秘訣を述べたもので、根底を陰陽転換の自然の法理に置き、これを人気の推移に応用して相場騰落の動向を観測した。以下に見るように多くの後世に残る金言、教訓が含まれているが、旧套を脱しえず、相場と無関係な解説も含まれる。

「豊年の凶年、凶年の豊年といふことあり」

「商の利分の時、六七歩にて取申物なり。十分は却て損のもといなり。」

「もうはまだなり、まだはもうなりといふ事有」

なお蛇足であるが、「虎之巻」の語について。明治期に出された『相場格言集：相場師の六韜三略』（栗原神通、明治41年）というパンフレットがある（『日本証券史資料』戦前編第9巻に採録）。「六韜」は太公望が選定したと伝えられる一部六編の兵書（文韜、武韜、竜韜、虎韜、豹韜、犬韜）、「三略」は太公望が述作したものを黄石公が張良に与えたと伝えられるが、後人の偽作であるとされる（講談社『新大辞典』）三巻の兵書（上略、中略、下略）で、共

に著名な中国の昔の兵書である。10書中の所謂「虎之巻」「竜之巻」「豹之巻」は「六韜」から取られた言葉であり、これらのうち「虎」は平成の現在でも「○○虎の巻」などとして社会に活きている。

四 商家秘録 大玄子（浪華の人）の著であるが、筆名の「玄」には「深遠なる道理」の意味がある。「商法三十余箇条書記す」として、目次は第1から第38に及ぶ。相場商に従事する者に徳性の具備、精神修養の必要なことを説き、商いの仕方について詳述、天井底及び通相場の観測法を述べ、その他多方面に及び、他書の説き及ばない方面を補い、米相場に従事する者の心得で必要な事項のほとんどすべてを網羅し、「恰も相場読本とも称すべきものである」と、安達は評価した。多くの相場文献はまた米生産の季節変遷と流通経路の分析を含むが、本書はとりわけその叙述に優れ、また38編の最後は米市場年中行事に当てられている。

「米商をなさんと思はば、大酒淫事盤上慰事固く禁ずべし」

「相場の高下は、人の売買するに付て高下するといへども、是をなすは人力の及ぶ所にあらず、天地自然の道理なり」

「商をせんと思ふ節、最初先損銀の積りをすべし」

五 米道大意 10書中ただ一つ、本書の著者は不明であるが、「堂島市場の関係者中、特に識見高邁の士」と推測されている。本書は市場の機構を説き、前出『出世車』は思惑の機能を述べることで、両々相俟って米相場の真相を闡明し、市場関係者から当局へ上納された、啓発の書であった。本書は特に、国民生活の必需品たる米穀も、天下御免の堂島の米相場があってこそ、経済上の諸機能を発揮することができ

ると強調した。頁数は少ないが、投機を賭博視する偏見を戒めた点を安達は高く評価した。本書冒頭に曰く、

「売買の道多しといへども、堂島米相場を以第一とする事、穀は人命を繋ぐの本なればなり。米穀豊凶に依て、潤と困窮するの差別あり。今諸国を考見るに、米穀豊穰の国あり、穀類至て乏しき国あり。然ども大阪堂島の米相場有に依て、天下おしなべて平均の直段あり。其場所え集る売買人は、唯利益のみに奔走するといへども、自然と六十余州の平均の直段を兼備ふ」

六 八木豹之巻 前掲『虎之巻』の著者の次作で、同じくタイトルの前に「糴糶」の文字が入っている。著者は『虎之巻』で米商の大法を詳細に記し、本書で「此道にまどはず、心を治る事のみを記す」と、述べた。すなわち「治心」が主眼で、他に米作の豊凶と密接に関係する天候・天災について詳述した。金言名句も相当数収められた。

「相場は上るか下るか、高下するか、又はちいさく持合うかなり、十が七ツ八ツは高下するなり。毎日の事なれば能仕覚べし、大に片付事は稀なりと心得て考ふべし。」

「米商に大功を得て富るは、皆能かんなんして、勤行をせし人なり。」

七 本間宗久翁秘録 資料紹介者による10書の紹介の中で、他項に比して本項の記述は格段に長いが、それには理由がある。本書が本名で書かれたことで出自の背景を探りやすく、著者の出自から米作地帯と米相場との浅からぬ関連を知りうるためである。出羽庄内藩（酒井氏所領）14万石に対して同地の本間家は24万石を産出したという。本間家は幕末には「本間様には及びもせぬが（ないが）、せめてなりたやお

殿様（酒井様、とのさまに）」と唄われた日本有数の富豪、大地主であった。本間家の勢力は大名・藩主を凌いだのである。徳川時代は集権的封建制度であり、土地領有は皇室御領、天領（幕府直轄領）、大名領地、社寺領地の4に大別しうる。百姓所持の高請田畑（検地帳に登録され年貢を負担する）については永代売買禁止令が存在したが、高請なき開発新田などは永代売買を許され、また年季売り（期間限定の売り）、本物返し（売却代金たる米を返却すれば土地を買い戻せる）、質流れ、寄進などいろいろな方法で譲渡が可能であった。すなわち禁止令の下でも土地の商品化はある程度進み、幕府直轄・藩領主以外に本間家のような豪農・豪商などは相当の土地を所有し、売買が可能な範囲で、資金に物を言わせてさらに土地所有を増やしたのである。

本書は、その出羽庄内の酒田本間家の遠祖、本間宗久翁の記述で、相場道の秘書、秘録の大方とは異なり、本名で発表されている。そのため、著書そのもの以外にはほとんど情報がない他の9書とは異なり、著者に関する情報が、著書の外部にそれなりに存する。以下、安達の解説と、青野豊作『相場秘伝 本間宗久翁秘録を読む』東洋経済新報社（平成14年）、さらに西野武彦『相場道 小説・本間宗久』日本経済新聞出版社（平成22年）とを合わせて、資料紹介者が整合的だと判断した宗久の出自と生涯とを記す。本間氏は佐渡本間氏（武家）の分家で、上杉氏の転封の際に山形へ移ったものが海運商人となった（地下人）が後に没落し、子孫も途絶えた。その分家筋で、近代まで栄えた本間家の初代が酒田の米屋「新潟屋」の本間原光である。青野著に拠れば、宗久（当初は久作、長じて古作など多くの通称を持った）の出自には、

2つの猶子・女婿説と、初代の実子説があった。戦前期の解説書の多くは猶子・女婿説（初代の猶子説と二代の猶子説）のいずれかを採り、明治期の宗久研究者として知られた早坂二菊（豊蔵、酒田の米相場師、著書に『米商叢書一庄内本間宗久翁遺書』（遺書とは秘録に同じ）など）は近隣の加藤家から二代目光寿の猶子となり、後に二代目の長女と結婚したとした。安達はこの説を採った。他方戦後も大分経った昭和46年刊の酒田市史編纂委員会編『酒田市史——史料編5・経済編上巻』に収録された山形大学工藤定雄教授の論は本間家に伝わる資料を調査した結果、初代原光の五男（後妻の子）が久作（宗久）であり、加藤家の娘と結婚し、妻の弟を養子として迎えたことを明らかにした。久作は年の離れた長兄・光寿の隠居後、甥の三代目光丘（二代目光寿の三男で後継者、安達に拠れば四代目、本間家中興の祖）の奉公修行中に当主代理を務め、本間家の家事一切を処理した。安達が光丘を四代目としたのは、当主代理を務めた時期の宗久を三代目と捉えたものと思われる。

その後の光丘活躍時代に久作は出羽（酒田）本間家とは別の道を歩んだ。当主代理時の久作は美田沃野、良港酒田、それに酒田米会所を活用して、期米の売買に当たり、身代を大きく増やした。この時期か、それとももう少し後になってか「相場の神様」「出羽の天狗」などと呼ばれたが、初代も三代目も彼の相場投機を好まず、三代目は久作と叔父甥の縁を切った。久作は酒田を出て江戸の米相場で投機をするが失敗、一度帰郷した後大阪に出て大いに活躍した。50歳で名を宗久と改め再び江戸に出て相場に成功し、三代目とも和解して、成功者として、長寿を得、87歳で没した。江戸の本間家は

江戸あるいは根岸本間家と名乗った。三代日光丘は困窮した藩財政を救うために財産を提供し、士分に取り立てられもした人物であるが、その財産の形成には元来の海運商人としての基盤の上に若き日の宗久の相場活動が大きく寄与したことになる。本間家は相場の収益を土地の購入に充て、田地を拡大して、大地主となり、その「日本一」といわれた農地所有規模は第二次世界大戦後の農地解放まで継続した。三井や住友とは異なり、本間家は明治以後に積極的商業活動を行わず、中央財閥化せずに、農業・米取引を基盤とした地方資産家・企業家として農地解放までを経過したのである。福本和夫『日本の山林大地主』青銅社（昭和29年）では、本間家は一応「地方財閥」としての形態は備えている、とされている。

本書が寛政年間に完成したとすれば、宗久の相場取引実践期の後半から老後期にかけてまとめたものであろう。宗久が若き日に経験した江戸の米相場における投機の失敗が、円熟期の大阪堂島を舞台とする大成功を生む熟考と戦略確立の一つの基盤になったことは疑いがないと思われる。本書の対象の広範さは157項目に及ぶ目次を読むだけでも知ることができる。1項目は全体に短くまとめられているが、中には「不作年駈引の事」など長いものもある。安達は本書の特徴を、商いを仕掛ける際の心がけ3点（出発点の方針、冷静に時機の到来を待つ、天井底の判断）、手仕舞いの際の心がけ3点（追敷の回数で、二つ仕舞、三つ十分、四つ転じ）を繰り返し印象付けたことに求めている。「恰も古聖賢の書を読むがごとく投機業者の座右の銘とすべき箴言は、本書の随所に散在している」という賞賛ぶりである。いくつもの意味で用いられているこの「三位（さんみ）の伝」と

いう秘伝は「秘録」とほぼ同じものとして認識され、「三位伝」が後に宗久の「相場三昧」の生涯をも示す「三昧伝」に転化したものではないだろうか。すなわち、宗久が門外不出の家伝の書としたものが時代と共に世間に広まって多くの呼び名を持つようになり、「三位伝」「遺書」「遺稿」「秘録」「三昧伝」などその書の編者により表現は異なっても、内容の根幹は同じものなのである。宗久の考え方を後世が敷衍し、確立したと考えられる、（宗久の根拠地であった酒田に因んで名づけられた）ローソク足を用いた酒田五法（三山、三川、三空、三兵、三法）、酒田罫線は現在でもテクニカルチャート分析手法の重要な一つと見なされている。宗久の書いたものとして『本間宗久相場三昧伝・相場道の極意』あるいはその焼き直し、『宗久翁秘録』現代語訳その他が現在でも流布しているが、『相場三昧伝』の内容は『宗久翁秘録』157項目からの抜粋である。古くは前出早坂の著書に『期米株式相場認識学——名・相場三昧伝詳解』信義堂（明治41年）があり、本間宗久といえば『相場三昧伝』というのが大方の市場人の認識であろうが、その大本、源泉が本書であることはいうまでもない。

「米商は付出大切なり」（最初に売買の方針を立てる）

「米商の秘伝気を転ずる事」

「天井を買はず、底を売らず」

「もうはまだなり、まだはもうなりと申事」

八 八木竜之巻 本来の書名は「売買極秘巻」だが、「八木竜之巻」と俗称し、前掲「虎之巻」「豹之巻」と合わせて、「八木三巻書」として尊重されたという。同じくタイトルには前に「羅羅」が付されている。とはいえ、「虎之巻」「豹之巻」の著者が猛虎軒であったのに、

本書には「見幾館主人撰」とあるのみで、安達はこれを「見幾館主人著」と解したが、無論猛虎軒と同一人物ではない。同一人物であれば「猛虎軒」を名乗ればよく、「竜之巻」を「俗称」する必要はない。また、「虎」と「豹」の刊行年には17年の間があるが、「豹」と「竜」には25年の間がある。同一人物とするのは不自然であろう。少し時代を下ったころの人物が、米相場について定評のあった「八木」の通り名を俗称として拝借し、これを「三巻書」と思わせたのは版元の判断であろうか。しかし本書は「八木」の名を借りただけの二番煎じではなく、相場必勝の術として難平法が有利であることを強く説いた。実行困難とされる難平をあえて推奨するのは「米市はあばれものに似たり」、市場は変幻出没、とうてい端倪すべからざるものとして、唯一の損失防止法として、また最後の勝利獲得法として、難平を取ったものである。八卦干支の妄信や神仏祈願を嗤うなど、理性的であることを、安達は高く評価した。

本書の目次は「或問目録」の題字を置き、20箇条のすべてが「或問云」（あるいはとうていわく）に始まる問答形式を採っている。交易の始まり、勝負の始まり、帳合市の始まり、と問答を進め、最後の7問が難平の勧めとなる。「難」は「損」の心に近く、「平」は「均（ならず）」であり、損のいくものを抱えていても仕方がないので、その物を増して損を埋め合わせて平等にならしていく道理なりという心持か、というのが安達の解釈である。

九 増補諸色相庭高下伝 玉江漁隱（浪華の人）の著（編）で、タイトルにある通り原版（享和元年）に増補訂正を加えた相当の自信作（安達による）で、米相場を中心に諸色（金銭、菜種、油薪蠟、松前物干物）相場に及んだ。著

者の創説は少ないが、翠樹老人の残した掌菓の術の紹介を安達は価値あるものとした。これは「上りても利を得、下りてももふくる重念帳尻必勝の奇術」で「巧に両建法と難平法とを併せ用いる」もので、理論上は成功する面白い方法だが、多額の資本金を要し、次第に手数料も嵩むので、軽々に実行できるものではないらしい。米相場以外については「概ね迷信的な解説」だとするが、各商品の研究者には参考になるようだ。

目録は32項目に及び多くが「○○の弁」という形を取る。「未決の商すべからざる弁」「臨機応変の弁」「商を翫まじき弁」「相庭に乗べからざるの弁」などである。

十 ト筮貨殖考 井上鶴州（大阪の人、本名）は易学の大家で、本書はその講述に基づき、門人が校訂上梓したものである。嘉永3年に改訂版も出ている。ト（ほく）とは易の卦に亀を用いるもの、筮（ぜい）とは同じく著（めどぎ）を用いるもので、「ト筮」で占いを意味する。内容は易の64卦を解説して米相場の騰落を予想する方法を述べたものであるが、安達は易そのものについては「或は中り、或は中らざるの理あらんや」と断定的ではない。しかし、易には人心を左右する性格があることは疑いがなく、本書は易学の知識と市場慣用語の知識が高く、ト易による米価観測の書として類書に抜きんできていると安達は評価した。『八木豹之巻』にも易が出てくるが本書の方が詳しい。64卦のうち初めの4卦の1行目を出しておく。

乾為天 人気と相場を見て、計るによし。

坤為地 人気相場ともに弱く、然れども、大に下りたるときは、月を越えて高くなるべし。

水雷屯 相場底強しといえども、人気弱し。

山水蒙 含み相場にして、高下持合動くこと少し。

以上10書、決して読み易いとはいえないが、安達の努力で、読む意欲があれば読めるようなレベルに編集された資料となった。

市場に内在する価格運動と相場心理学

安達の著作活動は大正末から昭和戦前期にかけてであり、とりわけ昭和9～10年に集中して商況研究会から数冊を刊行した。執筆に当たって本書に収められた徳川時代の相場道文献を大いに活用したであろうことは疑いがない。取引所における帳合米取引は明治以後も取引所定期取引に引き継がれ、農作物である米の特性から1年四季折々の長年にわたる経験則が有効であったろうことは頷かれる。しかしながら、明治11年の株式取引所取引開始以来すでに60余年を経てみれば、米取引その他の商品取引においても、ましてや近代的株式取引においては、卜易、干支、迷信等に強く影響を受けた市況判断はもはや主流になりうる時代ではなかった。本書が編纂された昭和16年当時の市場の実態は商品ではほぼ完全に統制市場になっていた。株式市場はいまだ形式的には自由市場が温存されていたとはいえ、現実には市場救済のための株価維持機関や株式価格統制令の登場が避けられなかった時代である。こうした背景を考えれば、本書を刊行したのはいささか時代錯誤の感無きにしも非ずといえるが、それを察知しえない安達ではなく、そのために一層、卜易・迷信を排する姿勢が強くなったのではないと思われる。

卜易・迷信を排した後に残るものは何か。徳

川時代に現実に存在した市場（米穀中心の全国的な商品市場）の内在的な価格運動である。いずれの著者も市場取引に深く関わること数十年、自らの売買の経験と他の関係者の経験とを踏まえて、季節性・自然条件からの影響の強い取引商品の性格を熟知した上で、相場心理学、市場心理学を打ち立てようとしたものである。明治以後の取引所取引の三大対象は米穀、生糸、株式であり、これらの内米穀と生糸には、国内外の流通性の拡大や生産性の著しい上昇があったとしても、徳川時代の相場心理学が相当程度有効であったと思われる。明治5、6年ごろから設立が開始された株式会社の発行する株式（株券）は、長い歴史を持つ米穀のような商品とは異なり、また大正～昭和期には初歩的ではあれ、その商品性に基づいたそれなりのファンダメンタル分析も始まっていた。さりながら、株式の発行方法は株主割当額面発行が主流であり、財閥企業の株式は多くが財閥内部で閉鎖的に保有されていた。株式の取引所取引は公開された株式の個別銘柄先物取引が中心であり、投機取引の比重が非常に大きかった。すなわち、株式の流通市場でもなお、徳川時代の商品取引の経験から引き出された相場心理学、市場心理学がある程度有効であり、信頼されうる基盤があったということになる。さらには、心理学という側面に深く侵入するならば、卜易・迷信といえども、売買取引者にとって共通の常識的な背景である限りは、彼らの形成する取引社会では少なからぬ影響を持ち得たとも考えられる。安達は狭隘な取引社会に根差すこうした因襲を排除し、近代的な取引分析に残せるものを残そうとしたのではないかと推測する。

安達は本書を編集する方法として、第一に原著にない「完全なルビ」を付し、第二に原著に

あった若干の注、すなわち「原注」をはるかに上回る編集者注を頭註に置くことで、古い文献を読み易く、かつ理解し易くすることに努めた。頭註部分は市場用語・相場用語のみならず、漢字の多用された文章、あるいは江戸時代の口語に慣れてはいないであろう読者のために「盤将 (碁将棋)」「奥義 (秘訣)」「よしなき (つまらない)」などの日常用語の解説までを含んでいる。もっともルビの表示方法は必ずしも統一されておらず、『宗久翁秘録』で「米商」は目次では「べいしょう」、本文では「こめあきない」となっている。「なには」も原本に拠り「浪花」「浪華」と異なる。「難平」も「なんびん」「なんびん」と両様がある。これらの不統一は内容による場合もあり、また本書刊行時点での印字工の能力の問題でもあるが、当研究所の資料集採録に当ってはあえて統一しなかった。細字のルビで「ひ」「び」「び」の区別は読み取りにくいということもあった。実際に全ページに目を通してみると、異本を付け合せつつ本文を読みこなして、頭註とルビを付す作業を数百ページに亘って行った安達の労力には脱帽するしかない。今回、本書を資料集に採録するに当たっては、前出の復刻版 (完全な複写) とは異なり、文章、頭註等についてはできる限り原文に沿うことを心掛けて組み直したが、挿絵・図表等については写真版とした。このため、写真にナンバーを付して写真頁にまとめて掲載し、文章中の該当箇所に写真ナンバーを注記する方法を採った。

なお、「徳川時代」という時代に限定して見れば、『北浜と兜町』文雅堂書店 (大正5年) 『本邦証券取引所の史的研究』文雅堂 (昭和17年) 等の著者である島本得一に『徳川時代の証券市場の研究』産業経済社 (昭和28年) という

著書がある。島本は大阪株式取引所、神戸穀肥取引所、東株代行等で実務に従事する傍ら証券市場の研究に励み、大学でも教鞭をとった篤学の士であった。戦後に刊行された『徳川時代の証券市場の研究』は戦時下の『本邦証券取引所の史的研究』が刊本・紙型共に戦災で失われ、市中の流布本も僅少になったため、その前半部を改訂増補して刊行されたものである。『史的研究』は全19章、第1章～16章が徳川時代、第17章～18章が明治以後で、第12章は「堂島米会所は証券市場なり」と題し、第19章「結論」で「取引物件の需給と全く無関係な」徳川時代の取引所の骨子が明治以後の日本の取引所制度の淵源であるとした。

その経歴から見て近代的な証券市場という名称も概念も明確になったのは大正後半期頃であることを身を以て知る島本が、「徳川時代の証券市場」という言葉で表現しようとしたものは何か。『史的研究』の冒頭を飾る米切手の写真と以下に見るその解説が最も短い表現で端的にそれを示している。

「この米切手が、堂島米会所の正米商内の取引物件で、この米切手と代価との授受で取引は結了し、その米切手が不渡となっても、売手は何等責任を負わない。損害は買手 (所持人) の負担である。それ故、堂島米会所は、米切手の取引市場であって、米の取引市場ではなかったのである。」

島本は市場取引の発達経路を、米国型 (実物取引中心で発達、一方で貸株・金融市場が発達し、投機は実物取引の形式で完全に行われた)、欧州諸国型 (実物取引と先物取引が共に発達、貸株・金融市場が発達せず) に対比して、日本では実物取引による投機が行われた傍ら、当初から物件代金の移転を伴わない「帳合米取引」

が案出実行されて、実物取引の価格を指導し、調節した、とした。本来の「帳合米取引」は実物取引の危険防止と価格の維持向上を狙いとしたが、やがて実物取引から離れて相場投機を著しく発達させたと言われる。米切手の形式による蔵米の証券化が日本における有価証券の発生の一つの経路であったことは大方が認めるところであろう。徳川時代の経済社会では他にも小切手、手形の類は多く用いられている。これら商品証券・貨幣証券を含めた広義の有価証券、あるいは近代法上の有価証券と、資本市場証券とは異なることが現在では共通の認識である。前掲の島本には戦時の著述にも戦後のものにもその区別がないのは時代の限界でもあるが、それと同時に「蔵米の証券化」及び証券化した「米切手の取引」を、その市場の「証券市場化」とし、「堂島は証券市場である」と断言することで近代的証券市場に直結させることが彼の研究の最大の目的であったからであろう。島本に拠れば堂島米会所の正米取引はその本質が証券取引であり、帳合米取引の本質は相場投機取引である。後者の相場投機取引が明治以後の米、生糸、そして新たな株式の取引市場に継承され、花開いたことは事実である。安達が『徳川時代経済秘録全集』を腐心して編集した意味もここにあった。近代的な証券市場にあっても相場投機取引が継承されていたからこそ、これらの「秘録」の真髓がなお市場に求められたのである。その意味では、戦前期の証券市場が真に「近代的」であったかどうかをむしろ問い直さねばならないのかもしれない。米、生糸などの商品取引は少数の銘柄商品の市場で代表銘柄に投機が集中する市場であったが、株式もまた個別銘柄先物取引（定期取引、清算取引）中心で、とりわけ株式会社組織の取引所株式（さら

には当所株）に容易に投機が集中しやすい市場であった。市場のこの実態が安達をも島本をも強く規定したであろうことを知っておきたい。

秘録から相場格言・金言へ

戦前期の市場では徳川時代以来の相場哲学、相場心理学が株式取引においても容易に受容された。その大本がこれらの「秘録」類にあることはいうまでもない。実際に動いていた市場の制度に規定される市場用語、その時々市场环境に規定される相場哲学なども加わって、明治以後の用語・格言等にはそれなりの変化を読み取ることができる。相場格言・金言の類はパンフレット状に印刷・頒布されてもすぐに散逸し、また別の人間が類似のものを印刷・刊行する、その際にその時点で世上に流布している語を付け加えていくという性格のものであった。秘録類から引き継がれたものの中核は21世紀の現在でも知られる「利喰千人力」「相場ハ理外ノ理テ動く」などであるが、「定期ノ下鞆ハ先安ヲ意味ス」など明治以来の定期取引を背景にしたもの、「株式市場ハ財界ノ「バロメートル」ナリ」など、有価証券取引から発生したものも見られる。「戦後ノ米高」などは明治41年刊行本で出てきたものであれば日露戦後の米高を早速反映して言われたものであろう。

第二次世界大戦後もこの風潮に変わりはない。すでに40年以上前のものであるが、豊商事株式会社企画調査部『株式商品相場読本』発行人：企画調査部長沓内武男（昭和43年）、がある。商品取引の入門書の体裁をとるが、内容的には「相場金言・市場用語」集で、収録された相場金言（いろは順、総数191）の中には、明らかに明治以後、あるいは第二次世界大戦後の

市場で作られたと思われるものが相当数ある。「株」「兜町」の文字が入るもの、明治以後の政治・経済・一般常識を反映するものである。以下のように徳川時代からの相場文献に由来すると明確に考えられていたものもいくつかある。

風吹かぬ二百十日の安値段 定式として待ち受けて買え (三猿金泉録)

難平商内損の因 (本間宗久翁)

明確な淵源は知られていなくとも、米相場由来と知られていたもの(彼岸天井、彼岸底)(豊作に売りなし)もあり、徳川家康(勝つことのみ知りて負くことを知らざれば害その身に至る)や宮本武蔵(心常に道を離れず)の「語録」と知られていたものもあった。『徳川時代 経済秘録全集』に選択されたような極め付けの相場道文献はすらすらと読み下すには困難が伴う。従って、必ずしもそのままの形で市場関係者や市場に群がる一般大衆に流布したわけではなく、明治期以後に相場が大衆化する過程で、すでに過去の文献でも多用されていた短詩形(五七五、五七五七七)あるいはそれ以下の

文字数で、文献に相場心得として書かれたものを土台にした金言・格言が作られて流布したものであろう。その際に、長い米相場の経験が罫線分析と投機心理分析の混合として活かされ、究極の勝ち負けを投機者自身が納得するためにも誰の目にも明らかな「勝者」家康や武蔵の語録が援用され、目の前の勝ち負けに一喜一憂するのではなく一種の人格陶冶を目標にすることになったと思われる。必ずしも相場金言独特のものではない言い回しが多く含まれることは、一面では相場「道」が経済取引による利益獲得を目指しつつ、それが実はなかなか困難なものであるため、人格の鍛錬を行う時間の方が長かった実態を皮肉にも示しているともいえる。因みに、千利休の言葉といわれる「人の行く裏に道あり花の山」は戦前期の金言・格言書には採録されていないが、この『読本』には採録されている。意外に新しく相場格言になったものようである。

(当研究所特別嘱託研究員)